

今週の為替相場見通し(2022年10月11日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		143.53 ~ 145.44	145.41	147.50 ~ 144.00
ユーロ	(ドル)		0.9727 ~ 0.9999	0.9742	0.9400 ~ 0.9900
(1ユーロ=)	(円)		141.16 ~ 144.07	141.58	139.00 ~ 143.00
英ポンド	(ドル)		1.1057 ~ 1.1493	1.1093	1.0900 ~ 1.1500
(1英ポンド=)	(円)	*	160.60 ~ 165.72	161.03	158.50 ~ 164.50
豪ドル	(ドル)		0.6355 ~ 0.6547	0.6374	0.6000 ~ 0.6500
(1豪ドル=)	(円)	*	92.41 ~ 94.70	92.56	88.00 ~ 93.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

市場営業部 為替営業第一チーム 原田 和忠

(1) 今週の予想レンジ: 147.50 ~ 144.00 円

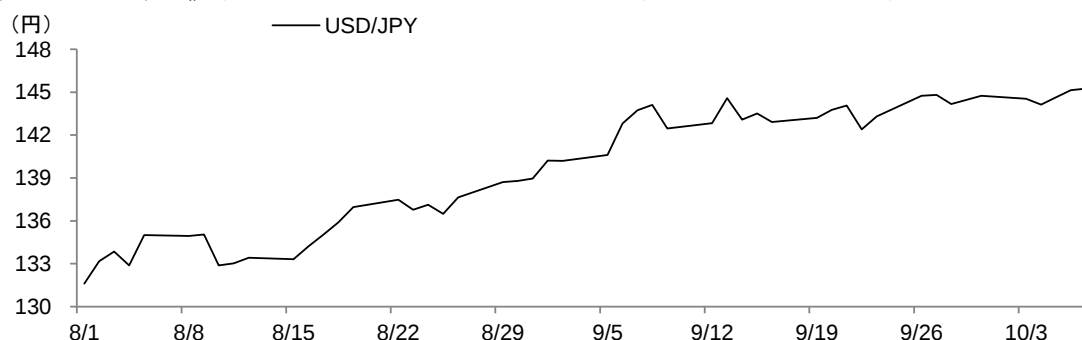
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円は週半ばに急落も持ち直し、底堅く推移した。週初3日、144.80円でオープンしたドル/円は一時週高値の145.40円まで急伸も、日銀による介入の警戒感から直ぐに反落。海外時間では米9月ISM製造業景気指数の冴えない結果や米長期金利低下を受けてドル売り優勢となり144円台前半まで下落。その後は米長期金利が下げ止まり、144円台半ばまで反発した。4日、ドル/円は円買い介入警戒感が漂う中で、145円を手前に伸びを欠く展開が継続も、海外時間では米8月JOLT求人件数の市場予想を下回る結果や米金利低下に143円台後半まで急落した。5日、ドル/円は前日海外時間のドル売りの流れを引き継ぎ、一時週安値の143.53円まで値を下げた後、米長期金利の反転上昇を受けドル買いが再開。海外時間では米9月製造業PMIや米9月ISM非製造業景気指数の良好な結果に144円台後半まで続伸。6日、ドル/円は144円台前半まで下落した後は、米長期金利上昇とFRB関係者の利上げに対するタカ派的な発言を受け、145円台前半までじり高に推移した。7日、145円台前半でオープン。米国時間までは米9月雇用統計や米国や日本が連休を控える中、ポジション調整中心の売り優勢となり、144円台後半まで下落した。その後、注目の米9月雇用統計が堅実な雇用環境を示したことからドル/円は上昇に転じ、145.41円で越週した。

今週のドル/円は底堅い推移を予想。先週発表された米9月ISM製造業指数は予想比軟調な結果となったものの、続けて発表された米9月ISM非製造業指数や、米9月ADP雇用統計、米9月雇用統計は良好な結果となった。米国の雇用状況は引き続き堅調なことから、米利上げスピードの減速は望めそうにない。11月のFOMCまでまだ時間はあるものの、主要経済データに変調が見られなければ、FRBはインフレ抑制に全力投球することは既定路線だろう。来月のFOMCでも+75bpの利上げを行うのであれば、黒田日銀総裁退任まで変わることはない日本の金融政策との対比で、ドル/円上昇バイアスは継続すると思われる。もっとも、145円台より上では当局の介入警戒感が出やすく、心理的なハードルもあることから、上昇スピードは限られるだろう。なお、今週は12日(火)にFOMC議事要旨、13日(木)に米9月CPI、14日(金)に米9月小売売上高、米10月ミシガン大消費者信頼感指数の発表が予定されている。特に当局関係者が重要視しているCPIについては、8月はコアベースで前年同月比+6.3%と7月の+5.9%から加速。住居費が高止まりしていることに加え、タイトな雇用環境や賃金の上昇が起因している。今後の利上げスピードを推し量るため、注目されるだろう。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(10/3~10/7)の値動き: 安値 143.53 円 高値 145.44 円 終値 145.41 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

市場営業部 為替営業第二チーム 逸見 久貴

(1) 今週の予想レンジ: 0.9400 ~ 0.9900 139.00 ~ 143.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロは下落。週初0.9795付近でオープン後、欧州経済の先行き懸念が意識される中、0.97台半ばまで下落。海外時間に入り、米金利低下に伴いドル売り優勢となると0.98台半ばまで上昇。その後、米金利が下げ渋る動きに0.98ちょうど付近まで反落。終盤はクロス/円の堅調推移にもサポートされ、小幅に値を戻した。4日、堅調な株式市場にサポートされユーロはじり高に推移。0.99ちょうど付近ではもみ合う場面もあったが、米経済指標の冴えない結果を受けポンドやユーロが買い戻される動きが継続。9月20日以来のパリティ(1ユーロ=1ドル)回復を試すも週高値の0.9999をつけ、押し戻された。5日、前日つけることが出来なかったパリティ回復を試す動きも見られたが、0.9995に留まると、その後はユーロ圏9月総合PMIの悪化によるユーロ売りや米経済指標の良好な結果を受けたドル買いによりユーロは0.99台を維持できず、0.98台前半まで急落した。6日、0.99台を回復する場面もあったが、米金利上昇や欧州の景気後退懸念が燃る中、ユーロは軟調に推移。ニューヨーク時間の午後には0.98台を割り込み、0.9789をつけた。週末、0.98ちょうど付近をもみ合った後、米9月雇用統計の結果を受けドル買い優勢となったことから週安値の0.9727まで下落。その後、米金利上昇一服を眺めながらユーロが買い戻され、0.9780付近まで反発。米債券安・米株安を受けて有事のドル買いが入り、再び安値圏まで下落。終盤にかけては小幅に反発し、0.9742で越週した。

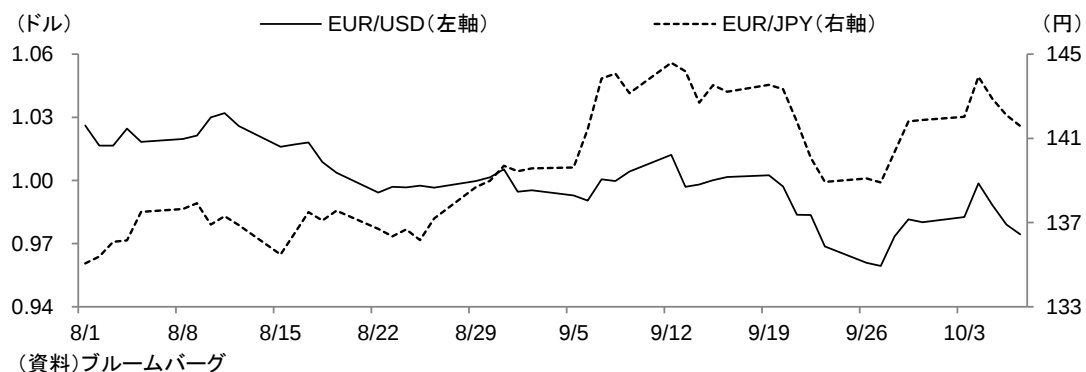
今週のユーロは軟調な推移を予想。テクニカルには2月以降の上値を結んだ抵抗ラインを抜けられず、右肩下がりの平行チャネルを形成。先週はパリティを目前にこのチャネルの上限に阻まれ反落。足許では直近安値と高値の半値付近まで下落しており、短期的にはユーロ売りに一服感が見られても良い水準であろう。しかし、欧州圏は長期化した地政学リスクや天候リスクによってエネルギー問題やインフレが深刻化し、また英国の政治的不透明感も相俟って、欧州に積極的に資金を投じ難い状況。金利面では、利上げへと舵を切ったものの、取り巻く環境からその継続性には疑義があり、今後の金利上昇を期待したユーロ買いも難しいと考える。タイミングとしても米雇用統計明けで、その結果はFedのタカ派スタンスを後押しする内容だっただけにドル買い地合いとなり易く、ユーロは上値の重い展開を想定している。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(10/3~10/7)の値動き:

(対ドル) 安値 0.9727 高値 0.9999 終値 0.9742

(対円) 安値 141.16 高値 144.07 終値 141.58



3. 英ポンド

欧州資金部 神田 史彦

(1) 今週の予想レンジ: 1.0900 ~ 1.1500 158.50 ~ 164.50 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は往って来いの展開。週初3日は1.12近辺で始まると、懸念されていた所得税減税策について英財務省が見直しを行う、との報道で英国債の買い戻しとポンド買いとなるも勢いは続かず1.11台半ばまで押される。だが米時間に米9月ISM製造業景況指数が予想比下振れると1.13台まで買い戻される荒い展開。4日は英国債が落ち着いた寄り付きとなり、株高も相まって1.14台後半まで買われる。しかし5日、6日と続けて英国債が売られたことでポンドは1.11台前半まで下落。週末7日は、引き続き英国債が弱かったが米9月雇用統計を控え若干の巻き戻しで始まり、1.12台を回復して始まる。しかし米9月雇用統計が予想対比やや良かったことでドル買いが強まると、ポンドは再び1.11台前半まで下落した。先週のポンドは対円でも160~165円台で振幅する荒れた展開を見せた。介入警戒感でドル/円が相対的に変動が小さかったこともあり、概ねポンド/ドルにつれた動きとなった。

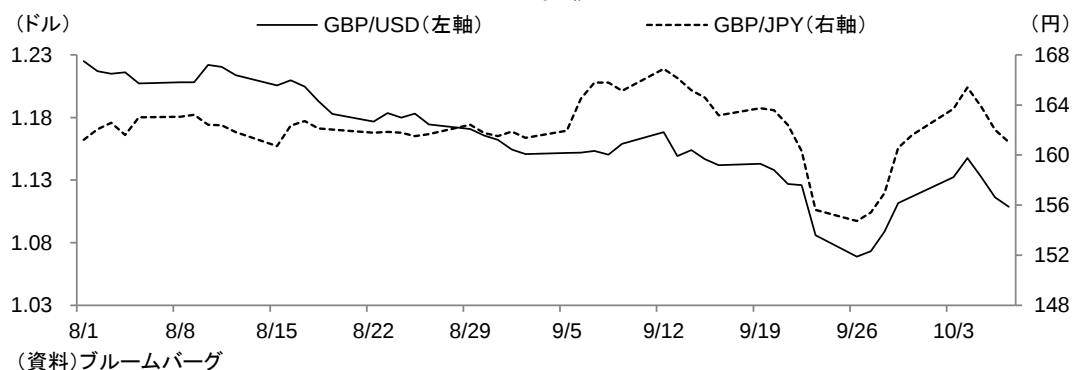
今週の英ポンド相場は、引き続きボラタイルな展開を予想。英国債の上下でその日のポンド相場の方向が決まる状況が続いている。英中銀の(一時的な)長期債買い支えで小康を得ているとはいえ依然不安定な状態で市場参加者は同話題にセンシティブだ。実際に国債の買い入れを英中銀が行わなかった日もあるとはいえ、同措置は14日に終了されるため、週末にかけての英国債のヘッドラインは多くの耳目を集めるだろう。もちろん前後での英国債価格とポンドの変動が大きくなるリスクには留意。一方でポンドの上方リスクとして考えられるのは、11月後半に予定される予算案の前倒し発表か。トラス政権の支持率はすでに下降しており、特に英国債売りを呼んだ減税案はじめ、上昇を続ける住宅ローンの対応を含め政権への風当たりは強い(ちなみに7日時点の某英ブックメーカーのオッズでは22、23年内のトラス首相退陣予想がそれぞれ20%弱、50%弱となっている)。一度は否定したが予算案を前倒しで発表することで巻き返しを図るインセティブは少なからずあるのではないかな。なお、オプション市場で観測されるインプライドボラティリティは1週間の値幅を対ドルでおおよそ±2%程度と見込んでいる模様。

(3) 先週までの相場の推移

先週(10/3~10/7)の値動き:

(対ドル) 安値 1.1057 高値 1.1493 終値 1.1093

(対円) 安値 160.60 高値 165.72 終値 161.03



4. 豪ドル

市場営業部 為替営業第二チーム 尾身 友花

(1) 今週の予想レンジ: 0.6000 ~ 0.6500 88.00 ~ 93.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドルは、もみ合いとなった。週明け3日、豪ドルは0.6410でスタートし、早朝からOPECプラスが減産を検討しているとの報道で、支えられた。NY時間に発表された米9月ISM製造業景況指数が低調な結果となった事を受けて、FRBの過度な引き締めに対する懸念が和らぎ、米金利が低下、米株は大幅に反発し、NY引けにかけて豪ドルは0.65台前半まで戻した。4日の豪ドルは0.65を跨いで振幅した。RBAが予想よりも小幅な25bpの利上げを発表後、金利のピークが市場が予想していたよりも近いと解釈され、豪3年債金利は2008年以来の大幅低下となり、豪ドルは0.6510から0.6451まで下落した。その後アジア株が堅調に推移すると、この流れが海外時間にまで派生し、米債が上昇（金利は低下）する中、豪ドルは一時0.65半ばまで戻した。その後も0.65を挟んで振幅し、NY引けは0.65近辺となった。5日の豪ドルは揉み合い。RBNZは政策金利を50bp引き上げ3.5%とすることを発表。政策会合の議事要旨では、75bpの利上げも検討したことが判明し、25bpに利上げ幅を縮小したRBAとは対照的にタカ派姿勢を鮮明にした。この発表を受けてNZDは瞬間的に大きく上昇したがすぐに反落して往って来い。豪ドルの反応は限定的だった。その後発表された米9月ADP雇用統計、米9月PMIサービス業が堅調な結果だったことを受けて、FEDのタカ派姿勢維持が意識され株安・米ドル高の展開に。豪ドルは0.6417まで下落した。引けにかけて米株が買い戻される中、豪ドルも上昇して0.6490近辺で引けた。6日の豪ドルは反落。米のタカ派的な引き締め姿勢が確認されドル買いが優勢となった。豪ドル/ドルは0.64付近まで反落した。週末7日の豪ドルは軟調推移。豪ドル/ドルは0.64ちょうど付近での揉み合いが続いた後、米9月雇用統計が堅調な結果となったことを受けてドル買いが優勢となり、豪ドル/ドルは0.63台後半までじりじりと値を下げてクローズした。週明け10日も豪ドルは軟調。0.63ちょうど付近まで値を下げた。

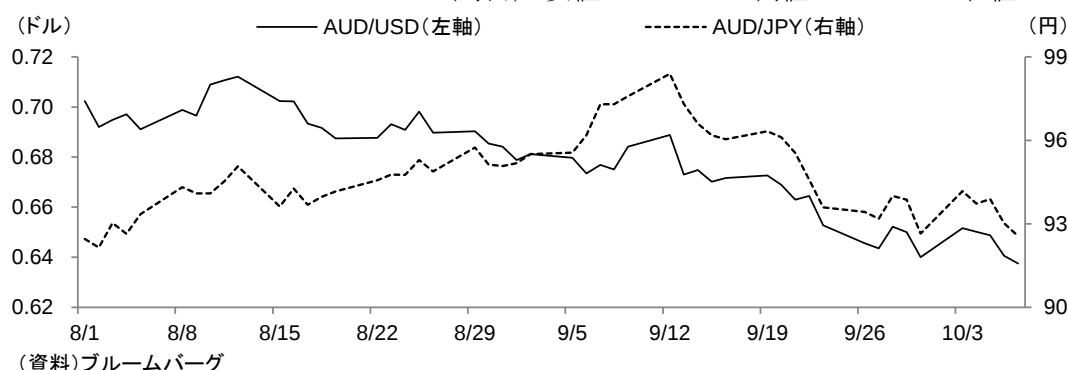
今週の豪ドルは軟調推移を予想。豪米の金融政策差を受けた豪ドル売りドル買いが相場を下押しするのではないかと。先週の豪金融政策決定会合では予想よりも少ない+0.25%の政策金利引き上げが実施された。7日に発表された豪RBA半期金融安定化報告書では、政策金利引き上げにより一部の企業や家計が厳しい状況に直面していることが指摘されており、金融安定リスクが増大していることが指摘された。ロウ豪中銀総裁はインフレを低下させるために政策金利引き上げを継続すると発表しているが、外部環境を見ながら引き締めを強めたり弱めたりしながらの舵取りとなりそうだ。一方で、FRBは金利引き締めの手を弱めることなく積極的に利上げを行う姿勢を示しており両者の姿勢の違いが浮き彫りになった。特に、米国では堅調な雇用がインフレの高止まりの要因として考えられており、先週金曜日に発表された米9月雇用統計にて雇用の伸びが確認された為、積極的な引き締めが継続するとの見方が市場で強まっている。今週は、11日（火）に、豪10月ウェストバック消費者信頼感指数や豪9月NAB企業景況感指数の発表が予定されており、豪中銀が懸念している市況の悪化がどの程度なのか確認できる。また、余談だが、今回豪中銀が利上げ幅を縮小したことで、金融引き締め姿勢の転換（引き締め姿勢の一時軟化）に追随する中銀があるのか注目が集まる。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(10/3~10/7)の値動き:

(対ドル) 安値 0.6355 高値 0.6547 終値 0.6374

(対円) 安値 92.41 高値 94.70 終値 92.56



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。